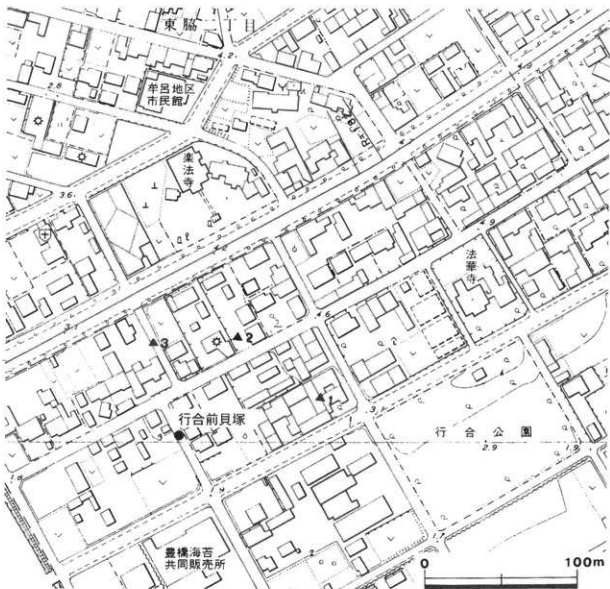


第5章 行合前貝塚

第1節 調査区の位置

県道豊橋港線の東脇西の信号から200mほど西に楽法寺がある。寺の西側にある小十字路を左折して南に入った辺りが行合遺跡である。突き当たった1筋目の道路を左にとって50mほど進んだ辺りが行合C貝塚である。1筋目の道を右に取ると、すぐ曲尺手に左に折れて2筋目の道路に向かって下がる。この坂道の両側が行合前貝塚である。豊橋港線の南2筋目の道路を東に150m進むと次の十字路で、その左手が行合A貝塚である（挿図第38）。今回の調査地点は行合前貝塚を貫いて1筋目と2筋目を結ぶ道路の中央部である。地籍は豊橋市東脇四丁目19番地・22番地の接点にあたる。



挿図第38 行合前貝塚の調査地点
 (▲1 権現神社遺跡、▲2 楽法寺前貝塚、▲3 行合遺跡)

第2節 調査の経過

1. 調査にいたる経緯

豊橋市における都市下水路築造工事が進捗して、牟呂地区の着工が決まった。それに関連して、東脇二丁目・四丁目地区の工事に伴う埋蔵文化財に関する協議がもたれた。その場で工区の平面図と4箇所の地質柱状図が提示されたが、この付近には行合遺跡・行合貝塚など存在したことが知られており、試掘して確認することになった。

昭和58（1983）年6月4日・7日の両日、5地点を選定して試掘を行った。第1地点は路面から3.2 mまで掘り下げたが洪積層に至らなかった。その間に砂層とシルト層が11層堆積していたが、何れの層からも遺構・人工遺物は検出されなかった。第2地点では路面から2.5 m掘り下げると洪積層が表れた。その間に7層の堆積がみられたが、上部4層は区画整理に伴う道路造成時の盛り土と推定され、第7層の暗灰色砂質シルト層には木片が含まれていた。第3地点では路面から約1 mで破砕貝層が表れた。第4・第5地点は切通しになっていて、舗装の直下が洪積層で遺構遺物は存在しなかった。

試掘の結果、第2地点と第3地点の間は発掘調査が必要であるという所見を下水道局に送った。

2. 調査の経過

7月16日（土） 晴れ

参加者 芳賀 陽、小畑頼孝

夏休みに入る7月21日から始まる発掘調査に備えて器具を揃え、牟呂地区市民館に運び保管を依頼した。調査員は愛知大学考古学研究会に、会員から充当するように依頼してある。

7月21日（木） 曇り一時雨

参加者 芳賀 陽、中村久視子、大竹良子、石黒弥生、池田素康、杉江佳樹

試掘第2地点から第4地点の手前にかけて幅2.5 mの発掘区を設定し、バックホーによって道路の舗装を除去して旧地表面を露出する作業を南から北に向かって進めた。午後には雨もあがり、調査員が宿舎から現場に到着したので器材を牟呂地区市民館から運搬して発掘の準備を整えた。

7月22日（金） 晴れ

参加者 芳賀 陽、森 雅美、中村久視子、大竹良子、池田素康、杉江佳樹

発掘区の北から3 mごとに区切って1 G～18 Gまでグリッドを設定し、その内1 G～4 Gの掘り下げを行なった。路面舗装時の碎石の下は暗茶褐色土層である。20 cm前後掘り下げると基盤である洪積層の上面が表れた。

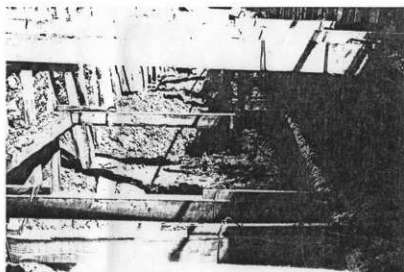
7月23日（土） 晴れ

参加者 芳賀 陽、森 雅美、中村久視子、大竹良子、池田素康、杉江佳樹

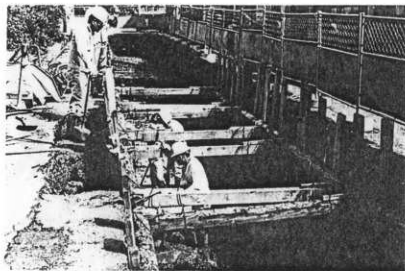
本日は4 G～6 Gを中心に調査を進めた。4 Gでは溝状遺構と、その中に埋まっている径20 cmの土管が検出された。溝を埋めている灰黄色礫層は6 Gに向かって広がっていたが、5 Gを中心に硬く締まっていて鶴嘴も歯が立たないほどであった。聞くところでは、区画整理の前にはバスの走る牟



挿図第39
通行止めにしてトラ柵で囲った
行合前貝塚調査区



挿図第40
行合前貝塚の台風による
壁面崩落状況



挿図第41
行合前貝塚の崩落した
壁面の復旧作業

呂往還が此処を通っていたそうである。6 Gでも灰黄色礫層で埋まった発掘区を横切る溝状遺構が検出され、瓦・瀬戸物・砥石等が出土した。

7月24日(日) 晴れ時々曇り一時雨

参加者 芳賀 陽、森 雅美、中村久視子、大竹良子、石黒弥生、池田素康、杉江佳樹

1 G～7 Gにおいて作業をした。1 G～3 Gでは遺構は検出されなかったが、暗茶褐色土層から円筒埴輪片が出土した。4 Gの溝状遺構内に埋められていた土管の部分から北に伸びる幅90 cm程の道状の遺構が検出された。6 Gでは灰黄色礫層の下に破碎貝混じり暗灰色土層が広がっていた。

7月25日(月) 晴れ

参加者 芳賀 陽、森 雅美、石黒弥生、池田素康、杉江佳樹

7 G～10 Gにおける調査を進めるにあたって、発掘区を東西に2分して中央のセクションをとることにした。路面から50 cm～60 cmは区画整理時の盛土で、その下に畑の耕作土であったと思われる破碎貝混じり暗灰色土層が広がっている。ついでアサリ・シジミ・ハマグリ・カキ等を含む暗灰色混貝土層である。7 Gでは瓷器もしくは行基焼の破片、10 Gでは水神平式の破片が出土した。なお9 G～10 Gにおいて試掘のグリッドの跡が検出された。

7月26日(火) 晴れ

参加者 芳賀 陽、森 雅美、池田素康、杉江佳樹

昨日に続いて7 G～10 Gの混貝土層を掘り下げた。各区から瓷器や行基焼きの破片が出土した。10 Gで水が湧き始めた。池田君が体調をくずし、午後は宿舎に戻って休息してもらう。

7月27日(水) 晴れ

参加者 芳賀 陽、森 雅美、大竹良子、池田素康、杉江佳樹

7 G～10 Gの混貝土層から出土した遺物を、位置とレベルを記録して取り上げる。11 G・12 Gの東半分を掘り下げたが、10 Gと同じレベルで水が湧きだした。やむなく、遺物の取り上げが終わった7 G～10 Gの西半部に移動した。

7月28日(木) 晴れ

参加者 芳賀 陽、森 雅美、大竹良子、石黒弥生、池田素康、杉江佳樹

7 G～10 Gの西半部の掘り下げを行なった。東側に断面が出ているので、正確に分層発掘するよう心がけた。馬の白歯・寛永通宝・須恵器片・瓷器片等が出土した。

7月29日(金) 晴れ

参加者 芳賀 陽、森 雅美、中村久視子、大竹良子、石黒弥生

9 G～14 Gの西半部の掘り下げを行なった。だんだん深くなって、掘った土を土捨て場に運ぶのが大変である。本日はこれといった遺物は出土しなかった。

7月30日(土) 晴れ

参加者 芳賀 陽、森 雅美、中村久視子、石黒弥生、富永欣吾

本日は豊橋市野依町の西山古窯を調査している班から富永君が応援にきてくれた。作業は13 G～17 Gの掘り下げである。造成前の水田と推定される暗灰色粘土層で、湧水のため直ぐに泥濁化してしまい作業は困難を極めた。壁沿いに溝を設けて水を汲み上げたがほとんど効果がない。バケツを使

用しての土揚げとなった。

7月31日(日) 晴れ

参加者 芳賀 陽、畚名信光、森 雅美、池田素康、杉江佳樹、佐藤文彦、下川裕之

4年生の畚名君と、西山班から佐藤君・下川君の応援があった。9G～16Gまでの発掘を進めた。前日と同様に水との戦いであった。

8月1日(月) 曇り一時雨

参加者 芳賀 陽、池田素康、杉江佳樹、佐藤文彦、下川裕之

昨日につづいて西山班から佐藤・下川両君が応援にきてくれた。相変わらず水との戦いで、12G・13Gの両側壁にそって排水溝を掘り泥を除去した。7G～10Gでは暗茶褐色混土貝層を掘り下げた。この層から小さな土器片がよく出土した。

8月2日(火) 晴れ

参加者 芳賀 陽、大竹良子、池田素康、杉江佳樹

依頼してあったユンボが来てくれたので、17Gの掘り下げを行なった。午前中に16Gと同じ深さまで排土できた。午後は7G～10Gの混土貝層の発掘を進め、条痕土器片・瓷器片等が出土した。

8月3日(水) 晴れ

参加者 芳賀 陽、小畑頼孝、森 雅美、大竹良子、石黒弥生、池田素康、杉江佳樹

7G～11Gにおいて混土貝層の発掘を進めた。8Gから9Gに向かって厚くなり、厚い部分では40cmをこえていた。この層から瓷器片が多数出土した。混貝土層の下は大小の礫を大量に包含した暗茶褐色土層である。7Gでは縄文式土器の底部が出土したが、その部分の色が特に黒いことから遺構の切りあいが予想された。

8月4日(木) 晴れ

参加者 芳賀 陽、森 雅美、大竹良子、石黒弥生、中村久視子、池田素康、杉江佳樹

7G～11Gにおいて発掘を進めた。7Gでは遺構の検出作業を進め、土壌が2つ確認された。土壌の中から11片の縄文式土器片が出土し、その内の1片には磨り消し縄文がみられた。9Gでは混貝土層から丸底の須恵器片が出土した。

8月5日(金) 晴れ

参加者 芳賀 陽、森 雅美、池田素康、杉江佳樹、石黒弥生、中村久視子、大竹良子、遠藤祐一、辻村英一

西山班から遠藤・辻村両君の応援をえて、11G～17Gを担当してもらう。7Gで昨日検出された土壌の発掘を進めたところ、土壌ではなくて幅60cm位の溝であることが判明しSD-1とした。8G・9Gの暗茶褐色土層から瓷器片・弥生式土器片が出土した。1G～6Gでは図面取りに入った。10G・11G・12Gでは混貝土層を掘り下げた。

8月6日(土) 晴れ

参加者 芳賀 陽、森 雅美、中村久視子、池田素康、杉江佳樹、和泉徹、遠藤祐一、田中博美

本日は西山班から和泉・遠藤・田中3君の応援をえて、12G～17Gの掘り下げに努力をした。1G～6Gでは平面図をとり終えた。8Gでは土壌がいくつも顔を見せてきた。

8月7日(日) 晴れ

参加者 芳賀 陽、杵名信光、森 雅美、佐藤文彦、下川裕之

本日も杵名君と西山班から佐藤・下川両君の応援があった。昨日表れた土壌を中心にして、7G・8Gの遺構の検出を行なった。7Gでは土壌SK-1・SK-2を見つけて発掘した。8Gでは土壌SK-3・SK-4を見付けて発掘した。

8月8日(月) 晴れ

参加者 芳賀 陽、森 雅美、大竹良子、池田素康、杉江佳樹

連日湧き水対策に時間をとられる。今日も12G~17Gの溝さらえ後、混貝土層を掘り下げた。8GにおいてSK-4に切られているSK-5が検出された。

8月9日(火) 晴れ

参加者 芳賀 陽、森 雅美、大竹良子、石黒弥生、池田素康、杉江佳樹、佐藤文彦、下川裕之

西山班から佐藤・下川両君の応援があった。SK-5の発掘を進め、埋土中から縄文式土器片が出土した。SK-5は径が125cm×108cm、深さが2cmであった。9G~12Gでは混土貝層を掘り下げ、瓷器片が出土した。

8月10日(水) 晴れ後曇り

参加者 芳賀 陽、森 雅美、大竹良子、石黒弥生、池田素康、杉江佳樹、佐藤文彦、下川裕之

本日も西山班から佐藤・下川両君の応援があった。12G~16Gの砂層を中心に掘り下げた。この層から木片が幾つも出土したが、加工痕の認められるものはなかった。こうした状態は昔の柳生川の川底の状態を示すものと考えられる。

8月11日(木) 晴れ

参加者 芳賀 陽、森 雅美、中村久視子、大竹良子、石黒弥生、池田素康、杉江佳樹、

遠藤祐一、辻村英一

本日も西山班から遠藤・辻村両君の応援があった。6Gでは調査区を横切る浅い溝が検出された。溝の埋土は破碎貝混じりの暗灰色土で、溝から南に向かって30cm~50cmの厚さで堆積している。4Gで検出された半呂住還の側溝と対をなすものであろう。7G・8Gでは基盤の洪積層を覆っている暗茶褐色土層を掘り進め、土壌6が検出され埋土から縄文式土器片が出土した。10G・11Gでは基盤面まで掘りあがり、区画整理前に埋設された土管が検出された。

8月12日(金) 晴れ

参加者 芳賀 陽、森 雅美、大竹良子、石黒弥生、池田素康、杉江佳樹、富永欣吾、佐藤文彦、

下川裕之、和泉徹

西山班から富永・佐藤・下川・和泉の諸君が来援してくれた。12G~17Gでは砂層を掘り下げ基盤面に達したが、枝状の木片が幾つか出土した。8Gを中心に暗茶褐色土層の調査を進め、土壌SK-7を検出した。SK-7はSK-3・SK-5に切られており、埋土から縄文式土器が出土した。SK-4の南側で土壌らしいプランが検出され、SK-8と仮称した。

8月13日(土) 晴れ

参加者 芳賀 陽、森 雅美、池田素康、杉江佳樹

6 G～11 Gの平面図の作成後、全員でセクションの検討をした。明14日から16日まで盆休みである。

8月17日（水） 雨

昨夜からの台風5号のため、調査を中止した。

8月18日（木） 晴れ

参加者 芳賀 陽、森 雅美、池田素康、杉江佳樹

昨日の台風とともなう豪雨によって崩れた壁の修復に午前中かかってしまった。午後から発掘区東壁断面図の作成にかかった。6 G・7 Gと10 G・11 Gが終了した。

8月19日（金） 晴れ

参加者 芳賀 陽、森 雅美、中村久祝子、石黒弥生、池田素康、杉江佳樹、水田ひろみ、加藤千尋、和泉徹

西山班から永田・加藤・和泉3君が来援。12 G～17 Gの平面図の作成と、8 G・9 Gと12 G・13 Gと14 G・15 Gの断面図作成が終了した。

8月20日（土） 晴れ

参加者 芳賀 陽、岡田 学、森 雅美、中村久祝子、大竹良子、石黒弥生、池田素康、杉江佳樹、佐藤文彦、下川裕之、辻村英一、和泉徹

とうとう最終日である。岡田君と西山班の佐藤・下川・辻村・和泉の4君の応援をえて、東壁の残りとし壁の北半部の断面図作成をすべて終了した。発掘用具を牟呂地区市民館に運んで解散した。

第3節 層序と遺構

1. 層 序（挿図第42～第45）

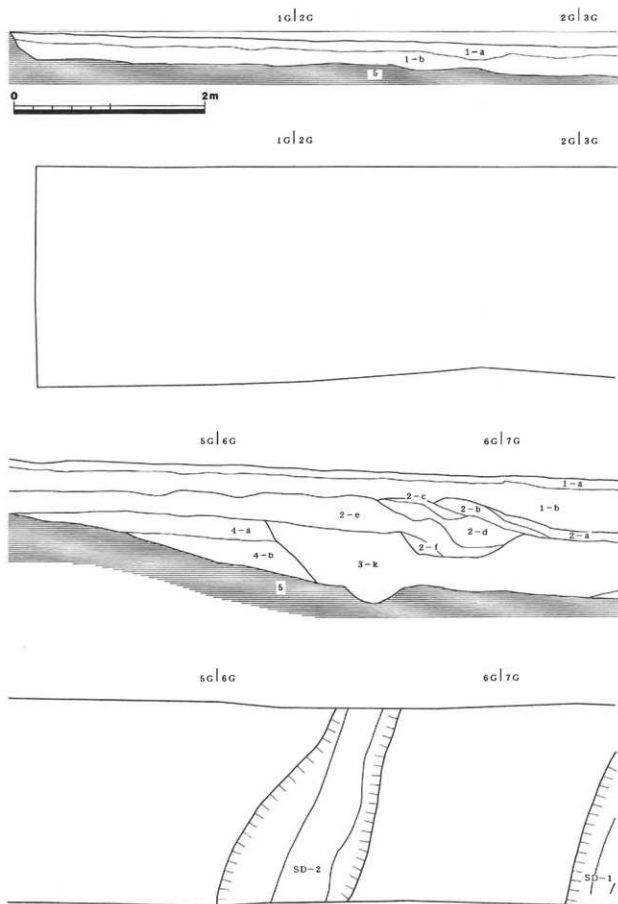
調査地点は牟呂町東脇地区の区画整理に際して新設された、牟呂台地から柳生川沖積地に向かって下る道路である。発掘区は道路のセンターにそった下水管埋設予定地で、方位N-34°-W、幅2 m×長さ48 m余、面積96 m²余である。

地山上に形成されている堆積層は厚いところで2 mを越え、検出された層序は28層にのほり大きく5層に分けられる。

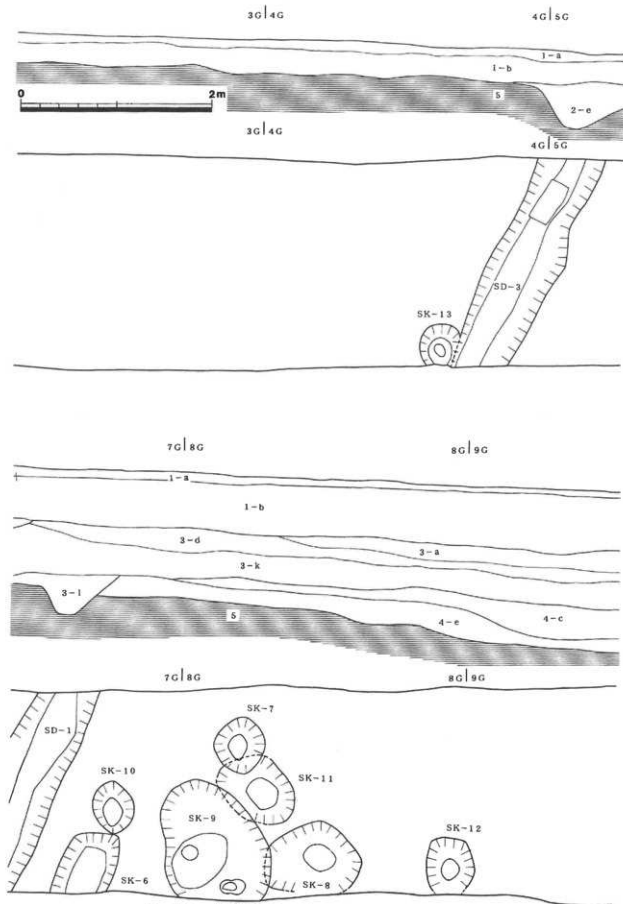
1層は道路建設に際して形成された層で、1-aの蟬緑凝灰岩の碎石層は路表であるアスファルトの舗装時に敷かれた下地である。1-bの淡茶褐色土層としたものは道路建設時の盛り土で、均質でなく場所によって様相が変化している。

2層は区画整理以前に使用されていた牟呂往還の新道に散布された砂利などで形成された層である。2-aの淡茶褐色土層・2-bの明茶褐色土層・2-cの暗茶褐色土層・2-dの黄茶褐色土層・2-eの灰黄色土層には大量の円礫が含まれている。中でも2-e層はバスなど自動車の交通があった故か、鶴嘴も受け付けなほど堅く締まっていた。2-fの茶褐色土層と2-e層の北端は往還の側溝への堆積である。

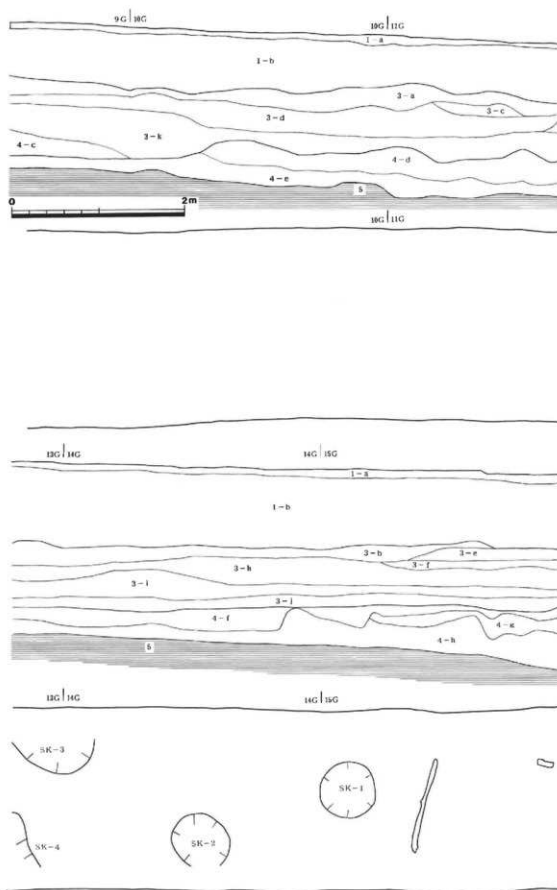
3層は牟呂往還旧道の建設から新道の建設までの間に形成されたものである。12層のうち3-a破砕貝混じり濃灰色土層・3-b暗灰褐色シルト層・3-c暗灰色土層・3-d破砕貝混じり暗灰色土層・3-e黄褐色土層・3-f暗色シルト層・3-g暗灰色シルト層・3-h濃灰色シルト層・3



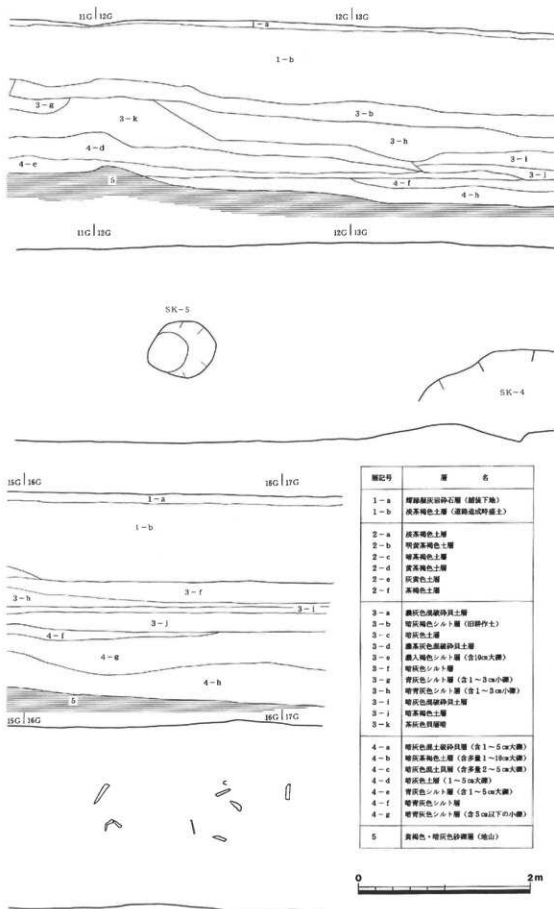
挿図第42 行合前貝塚 調査区の平面図・断面図 (1)



挿図第43 行合前貝塚 調査区の平面図・断面図 (2)



挿図第44 行合前貝塚 調査区の平面図・断面図 (3)



挿図第45 行合前貝塚 調査区の平面図・断面図 (4)

ー i 青灰色シルト層・3-j 暗青灰色シルト層・3-k 破砕貝混じり暗灰色土層の11層は、3-k層が直接旧道の路面を覆っていることから新道の建設に際して形成されたものと想定される。このうち混土貝層である3-a・3-d・3-kの3層は6 Gから12 Gにかけて3層の主体をなしている。3-1 暗灰色混土貝層は旧道が機能していた期間に側溝内に堆積したものであろう。

4層は4-a 暗灰色混土破砕貝層・4-b 暗灰茶褐色土層・4-c 暗茶灰色混土破砕貝層・4-d 暗灰色混土貝層・4-e 暗茶褐色土層・4-f 暗灰色シルト層・4-g 青灰色シルト層・4-h 暗青灰色シルト層の8層で構成されている。このうち4-a・4-bの2層は旧道工事の際に削り残された台地の斜面に形成されていた層の残りである。4-c層は8 Gから9 Gにある混土貝層、4-c層は10 G～13 Gにかけて存在する混土貝層で、同じ混土貝層である4-a層に関連するものであろう。4-e層は7 G～12 Gにかけての台地崖面を覆っており、北端を旧道の側溝に切られていることから4-bと共に旧道建設以前の表土層であることは確かである。4-f・4-g・4-hの3層は12 Gで4-e層の下から16 Gを越えて南に伸びており、4-e層が形成される以前に俣生川沖積地において形成された層としてよからう。

5層は地山の砂礫層である。台地の傾斜面に当たるところは黄褐色を呈しているが、沖積地の下にのびる低い部分は暗灰色を呈している。

以上5群の層序のうち、1群～3群は道路建設など工事に伴う土砂の移動によって形成されたもので、近現代における土砂移動の影響を受けていない本来の層序は4層を構成している4-a～4-hである。

2. 遺 構

(1) 土 塼

SK-1 (挿図第46)

15 Gにおいて検出された土塼で、地山の5暗灰色砂礫層に掘り込まれていた。平面形はほぼ円形で、規模は径64 cm×66 cm、深さ13 cmを測る浅い遺構である。埋土は暗青灰色シルトである。

SK-2 (挿図第46)

14 Gにおいて検出された土塼で、地山の5暗褐色砂礫層に掘り込まれていた。平面形はほぼ円形で、規模は径61 cm×69 cm、深さ15 cmを測る浅い遺構で、青灰色シルトが埋めていた。

SK-3 (挿図第46)

13 G～14 Gにかけての西壁に半ばかかって検出された遺構である。5暗灰色砂礫層に掘り込まれており、検出した部分の規模は径41 cm×101 cm、深さ13 cmを測る小判形の平面形をもつ浅い遺構である。埋土は暗青灰色シルトである。

SK-4 (挿図第47)

13 Gの西壁下に半ば以上を隠して検出された遺構で、5暗灰色砂礫層に掘り込まれていた。検出された部分の平面形は不整形で、規模は径54 cm×172 cm、最大深は27 cmで、埋土は暗青灰色シルトである。

SK-5 (挿図第46)

12 Gにおいて地山である5暗灰色砂礫層の上面から検出された遺構である。平面形は円形に近く、

規模は径67cm×80cm、深さ28cmを測る。埋土は暗青灰色シルトである。

SK-6 (挿図第46)

7Gにおいて西壁に一部隠れた状態で、地山の黄褐色砂礫層の上面から検出された遺構である。平面形は角張った不整形で、検出部の規模は径62cm×66cm+α、深さ13cmを測る。埋土は礫を含む黒色土で、形式は不明である。

SK-7 (挿図第46)

7Gにおいて地山面から検出された遺構である。平面形はほぼ円形で、規模は径56cm×61cm、深さ25cmを測る。埋土は礫を含む黒色土である。この遺構はSK-11との間に切り合い関係があり、SK-11よりも後で掘られた遺構であることが明らかである。

SK-8 (挿図第46)

8Gの西壁の下に一部隠れて、地山面から検出された遺構である。平面形は不整形で、規模は径96cm×70cm+α、深さ30cmを測る。埋土は礫を含む黒色土である。この遺構はSK-9と切り合い関係があり、SK-9よりも先に掘られていた遺構であることが明らかである。

SK-9 (挿図第46)

7Gから8Gにかけての西壁の下に一部が隠れた状態で検出された遺構である。地山面に掘り込まれた遺構の平面形は楕円形に近い不整形で、検出部の規模は111cm×146cm+αで深さ25cmである。埋土は礫混じりの黒色土で、側壁部に柱穴状の小土坑が穿たれている。この遺構はSK-8・SK-11と切り合い関係をもち、両者より新しいことが明らかである。

SK-10 (挿図第46)

7GにおいてSK-6に隣接して地山面から検出された遺構である。楕円形に近い平面形をもち、規模は径43cm×56cm、深さ27cmを測る。埋土は礫混じりの黒色土である。

SK-11 (挿図第46)

8Gの地山面から検出された遺構で、平面形は楕円形に近い不整形である。規模は52cm+α×90cm、深さ20cmを測る。埋土は礫混じりの黒色土である。

SK-12 (挿図第46)

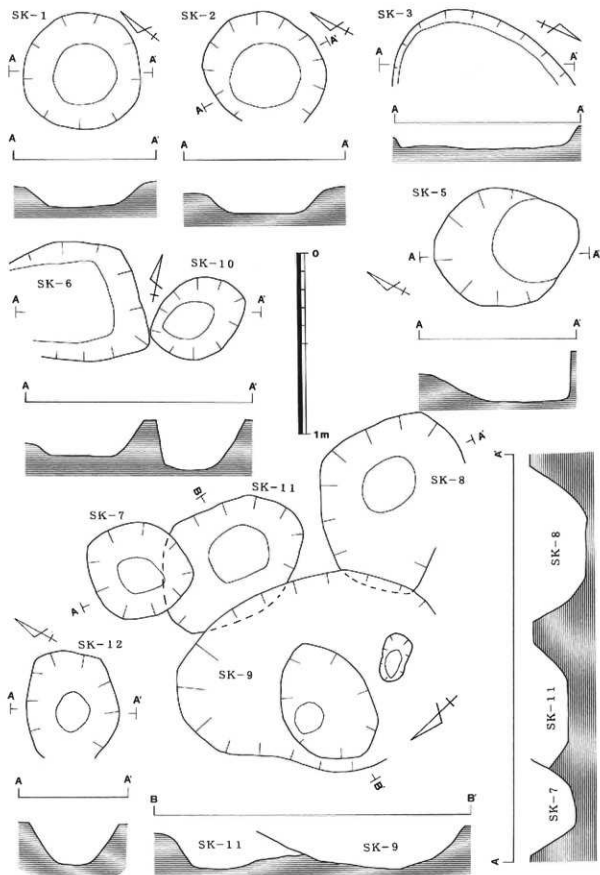
8Gと9Gの境で、一部が西壁に隠れて地山面から検出された遺構である。平面形は小判形に近い。検出された規模は径50cm×69cm+α、深さ23cmを測る。埋土は礫混じりの黒色土である。

(2) 溝

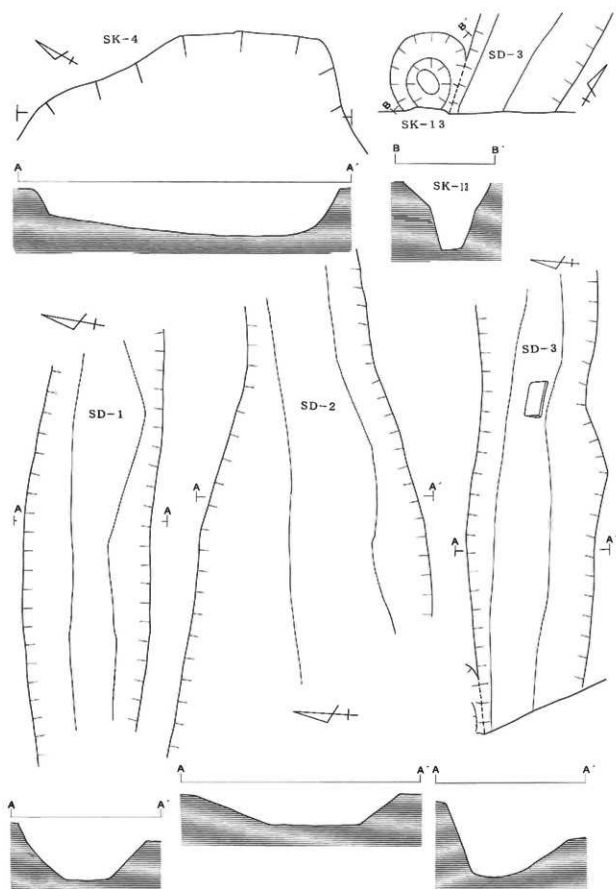
SD-1およびSD-2 (挿図第47)

SD-1は7Gの東壁から西壁にかけて、調査区を横断する形で検出された遺構である。4-c暗灰色泥土貝層を切って地山に堀込まれており、規模は幅は58cm～72cm、深さは30cm前後である。埋土は礫混じりの暗茶褐色土である。

SD-2は6Gを横切って検出された、4-a・4-b層を切って地山に掘り込まれた遺構である。規模は幅が76cm～133cm、深さは20cm前後である。埋土は3-k暗灰色混貝(破碎)土層である。この遺構の南側の上端とSD-1の北側上端の間は地山がほぼ水平に削平されており、その大半を3-k層が覆っている。この間は2.7m前後を測り、尺に換算すると9尺になる。したがってSD-1・



挿図第46 行合前貝塚 遺構平面図・断面図 (1)



挿図第47 行合前貝塚 遺構平面図・断面図 (2)

SD-2と削平部は一体で、1間半の路幅をもった道路とその側溝を示す遺構と考えられる。

SD-3およびSD-4（挿図第42、第47）

SD-3は4Gと5Gの境を横切って検出された遺構で、地山である5黄褐色砂礫層に掘り込まれている。規模は幅が58cmから80cm、深さは40cm前後で、埋土は礫を含んだ灰黄色土層である。

SD-4は6Gの南端部を横切って検出された遺構で、3-k暗灰色混貝土層に掘り込まれている。規模についての記録を失ったが、東壁が幅が130cmで、深さは25cmを測る。埋土は玉砂利を主とした砂礫で、2-a～2-d層の小規模な堆積が繰り返行なわれている。SD-3とSD-4の間は約4mで、ほぼ水平に整えられており、上面に固く締まった砂礫層が厚く堆積している。この溝SD-3・SD-4と平地は一体の遺構で、前者と同様に道路と側溝を示す遺構と考えられる。

第4節 遺物

この遺跡における本来の堆積層である4層のうち、木片類を除いた遺物が出土したのは混土貝層である4-a・4-c・4-d層と貝層下土層にあたる4-e層である。混土貝層から出土したのは瓷器・行基焼・かわらけ・陶磁器である。貝層下土層から出土したのは縄文式土器・古式土師器・瓷器・かわらけ・内耳鍋・天日茶碗や丸碗などの陶器である。中でも縄文式土器は7G～8Gに集中している。土壌SK-6・SK-7・SK-9からも出土しており、4-e層の下部に縄文式土器の包含層が存在したことは確かである。

近・現代に客土された1層～3層のうち、3層を構成する層群から出土しているのは縄文式土器・埴輪・須恵器・瓷器・土師器・陶器である。縄文式土器は溝SD-1の埋土からで、本来4-e層に属していた可能性が高い。2層を構成する層群は、路面に散布された砂礫の堆積層で、遺物をほとんど含まない。1層を構成する層のうち、1-a層はアスファルト舗装の下地で遺物は全く含まれていない。1-b層からは埴輪・陶磁器が出土している。なかでも埴輪はこの層に集中しており、土砂の供給元に埴輪を備えた古墳が存在したことを示している。

1. 縄文式土器（挿図第48の1～20）

1は深鉢形土器の口縁部である。口縁部の中ほどで内彎している。屈曲した部分の後に笊状器具による押し引き風の刻みを施している。内外面ともにナデによる調整痕が見られる。口端はやや丸みをもたせている。色調は茶褐色で胎土は粗い。2はやはり深鉢形土器の口縁部である。口縁部をやや肥厚させている。この部分には笊状器具による浅い波線を施している。内面にはナデ痕が残る。色調は暗茶色を呈している。1・2は後期末の伊川津式と考えられる。3は深鉢形土器の口縁部である。無文ではあるが口縁端部をやや外反させ、口端は丸く仕上げられている。色調は暗茶色を呈している。時期は不明である。4は深鉢形土器の波状口縁部である。内外面に笊状器具によるケズリ痕が認められる。口端にはナデ調整痕が認められる。色調は茶褐色である。時期は伊川津式と考えられる。5は深鉢形土器の口縁部である。外面には貝殻条痕が認められ、口端にも貝殻による横位の条痕が施されている。内面には繊維束による横位のナデ痕が認められる。色調は黄褐色を呈し、胎土・焼成ともに良好である。胴部片10・11は調整方法・色調・胎土・焼成の観察から5と同一個体と考えられる。

時期は晩期後葉の西ノ山式に属すると考えられるものである。6は胴部片で、外面に幅0.3cmの棒状器具による沈線で画した内に L_R^{L} の縄文を施したものである。内面にはナデ調整痕が認められる。色調は黒褐色を呈している。7は胴部片である。摩滅が激しく調整痕は認められないが、幅0.3cmの棒状器具による1条の横線が認められる。色調は茶褐色である。8は上胴部片である。幅0.2cmの棒状器具により0.8cm間隔で2条の沈線を描き、内部に L_R^{L} の縄文を施した磨り消し縄文風の土器である。内面にはナデ調整痕が残る。色調は暗茶色で胎土・焼成ともに良好である。9は上胴部片である。下端に棒状器具による1条の薄い沈線が認められる。内面には横方向に粗い繊維束によるナデ痕が認められる。色調は暗茶色で、胎土は良好だが焼成は不良である。12は胴部片である。外面には条痕が認められる。内面は剥げ落ち調整痕は認められない。色調は暗茶色で胎土は良好である。13は胴部片である。外面には幅広で深い条痕が施される。内面にはナデ調整痕が認められる。色調は明茶色で、胎土中に0.2cmの石粒を含む。14は下胴部片で、外面に薄い線状の条痕が認められる。内面にはナデ調整痕が認められる。色調は暗褐色で、焼成は良好である。15は下胴部片である。外面には幅0.3cmと幅広の条痕が認められる。内面にはナデ調整痕が認められる。色調はやや赤みを帯びた茶色で、胎土中に0.3cmの石粒を含んでいる。焼成は良好である。16・17は胴部片である。いずれも摩滅が著しいが、外面に条痕が残る。色調はいずれも暗茶色を呈し、胎土は良好である。以上の土器片中、調整痕・色調・胎土から12・14・16・17については伊川津式に伴うものと考えられる。13・15は時期の下層水神平式土器の可能性が高い。18は底部で、底面に砂粒痕が残る。19は底部で、底面には乱れているが素胚痕が残る。20は底部で、摩滅が著しく器表面の観察ができない。いずれの底部も、色調は暗茶褐色である。

2. 古式土師器 (挿図第48の21～23)

21・22は、壺形土師器の底部である。摩滅が著しく、器表面の観察ができない。色調はいずれも黄茶色である。23はS字口縁をもつ台付甕の底部と脚台のつなぎ目の部分である。外面にはハケメが見られ、内面には体部・脚台ともに指痕が残る。色調は暗灰色を呈し、焼成は良好である。

3. 埴輪 (挿図第48の24～43)

24～37は、埴輪の胴部片である。色調はいずれも黄茶色を呈し、焼成は良好である。外面にタテハケ調整を内面にヨコハケ調整を施したもの(24～27)、外面にタテハケ調整を内面にヨコ板ナデ調整を施したもの(29・30・33・34・36・37)、外面にヨコハケ調整を内面にヨコ板ナデ調整を施したもの(31)、外面に一次調整のタテハケを施したのち二次調整のヨコハケを施し内面には板ナデ調整を施したもの(35)がある。28は突帯が剥落した部分である。38～43は突帯をとまなう胴部片である。色調はいずれも黄茶色を呈し、焼成は良好である。38・39の突帯にはヨコナデ調整痕が、胴部にはタテハケ調整痕が、内面にはタテ板ナデ調整痕が認められる。40・41は摩滅が著しく調整痕は見られない。42は朝顔形埴輪の頸部である。摩滅が著しく調整痕は明らかでない。43も朝顔形埴輪の頸部である。突帯にヨコナデ調整痕が残る。内面は摩滅が著しく調整痕は明らかでない。これらの埴輪は古墳時代中期末から後期初頭のものであろう。

4. 土師器 (挿図第48の44~47)

44~46は甕の口縁部片である。外面にはヨコナデ調整痕が認められる。口端はヨコナデ調整を施し平坦に仕上げられている。内面はやはりヨコナデ調整により折れ曲がった位置で明らかな稜をつくっている。色調はいずれも暗茶色を呈し、胎土中に0.2cmの石粒を含んでいる。焼成は良好である。47はいわゆる清郷形甕である。口縁部は口端に向かいゆるやかに外反し、口端を肥厚させている。内面ではヨコナデ調整により面取りを行い、2段に後線をつくっている。色調は茶色である。胎土中には0.3~0.5cm大の石粒を含む。焼成は良好である。44~46は平安時代前半、47は平安時代後半と考えられる。

5. 中近世土器 (挿図第50の95~106, 127~129)

かわらけ (95~99) 95・96は、いずれも底面に糸切り痕が認められるかわらけである。口端はヨコナデ調整により内側にやや内彎している。口縁部外面ではヨコナデ調整痕が認められ、内面はていねいになでられている。また96には底面から約1cm上部までヘラケズリ調整痕が認められる。いずれも色調は明黄褐色を呈し、焼成は良好である。97~99は、底面に指痕が残るかわらけである。口端は丸みをもたせ仕上げられており、口縁部外面は指によるナデ痕が認められる。内面はていねいにナデ調整を行っている。色調は暗白灰色を呈し、胎土中に細かな砂粒を含む。焼成は良好である。

内耳鍋 (100~103・105) 100~103は、内彎する口縁部をもつ内耳鍋である。口端は強いナデ調整により凹みがつく。口縁部外面には指痕の上にナデ痕が認められる。内面にはナデ調整を施している。いずれも外面の口端部まで煤の付着が認められる。色調は暗黄灰色を呈し、焼成は良好である。

105は、くの字形口縁をもつ内耳鍋である。口端にナデによる凹みをもち、外面には指痕とナデ痕が見られる。色調は灰褐色を呈し、焼成は良好である。時期は100~103が江戸時代、105は室町から戦国時代であろう。

直口鍋 (104・106・129) 104・129は体部上方がほぼ直立し、口縁部がわずかに外方へ開く器形である。体部から口縁部にいたる部分の内面に稜がつけられている。口端はナデ調整によりやや凹みをもたせたつくりになっている。外面には指痕とナデ痕が、内面には横方向のナデ痕が認められる。色調は黄茶色を呈し、焼成は良好である。

106は瓦質の鍋である。体部から口縁部にいたる部分が明確な段をなし、口縁部をほぼ直立させている。口端は鋭いケズリによって面をなしている。口縁の一部を上方へ突出させて把手の取り付け部を形成し、直径約4mmの円孔が穿たれている。内外面ともにミガキ調整が加えられている。色調は内外面とも黒灰色を呈し、胎土に少量の砂粒を含み、焼成は良好である。

いずれも江戸時代後半のものであろう。

鉢 (128・130) 128は小ぶりで、口端は丸みをもたせつくられている。内外面ともナデ調整痕が見られる。色調は茶色であり、胎土中に石粒を含み、焼成は良好である。130は大ぶりの鉢である。口端は平らに仕上げられ、内外面にナデ調整を施している。色調は暗茶褐色で、焼成は良好である。江戸時代後半のものであろう。

大甕（127） 土師質の大甕で、器厚は1.8cm前後である。口端を3.7cmほどに肥厚させて上面を蓋受け状の溝をつくりだし、外端をまるくおさめ、内端を鈍くとがらせている。内外面にナデ調整が見られる。色調は明茶褐色を呈し、胎土には砂粒を含み、焼成は良好である。

6. 須恵器（挿図第49の48～53）

本調査では、須恵器・瓷器および行基焼片が整理コンテナ1箱分出土している。大半が小片のためそれぞれの区別は非常に難しいが、筆者の観察では瓷器が大半を占め、須恵器と行基焼はごく少量である。そのうち明らかに須恵器と識別できるのは、次の6点である。器種としては蓋坏・高坏および瓶類が見られる。

坏蓋（48） 奈良朝須恵器の器形である。天井部は平坦で外面に回転ヘラケズリ調整を施し、頂部に扁平な擬宝珠形の鈕をつけている。口縁部を欠いており、かえりの有無は不明である。

坏身（49～51） 底部片が3点確認できる。いずれも高台を伴う奈良朝須恵器の器形である。扁平な底部には回転ヘラケズリ調整が施され、断面台形もしくは逆台形の角張った高台をつけている。体部片および口縁部片もあるが、細片であり器形を明らかにできない。

高坏（52） 先端を欠いた脚部片である。また坏部も大半を欠いているため、高坏もしくは高盤の脚部としか推定できない。器壁は厚く、頑丈なつくりである。スカシ孔は見られない。

瓶類（53） 頸部の中ほどより下を欠いており、全体の器形および器種は推定しがたい。口縁部は肥厚してわずかな凹面をなし、端部は極めて鈍いつくりである。口縁部直下に断面が鈍い三角形の突帯を巡らす、段による装飾の名残りであろう。外面に厚い降灰が見られる。

7. 平安朝瓷器（挿図第49の54～92）

出土遺物のなかでは比較的多くを占めるが、器種としては碗類のほか皿・長頸壺・甕がみられるのみである。

碗（54～84） 観察により40点余を確認したが、口縁部および体部はいずれも細片であり、図示し得るのは底部片のみ31点である。外面の調整および高台の形状から、次の5種類に分類が可能である。

a類（54） 底部外面に回転ヘラケズリ調整を施し、断面の角張った高台を伴う器形である。本調査では1例のみ確認した。高台の内外面を含む全面に灰釉が施される。平安朝瓷器第1型式（猿投編年K-14号窯式並行）の製品であろう。

b類（55～60） 底部外面に回転ヘラケズリ調整を施し、高台の形状は、外面下方を内傾させ内面が内彎した断面三日月形を呈する。底部のヘラ記号が1例のみ確認できる（56）。平安朝瓷器第2型式の古段階（猿投編年K-90号窯式並行）に比定できる。

c類（61～79） 底部外面の回転ヘラケズリ調整が省略され、糸切り後ナデもしくは糸切り未調整である。高台はb類と同様の断面三日月形を標準とするが、丈の低いものも含まれる。平安朝瓷器第2型式の新段階（猿投編年0-53号窯式並行）に比定できる。

d類（80～83） 底部外面が糸切り未調整で、高台の断面は逆三角形を呈する。平安朝瓷器第3

型式（猿投編年H-72号窯式並行）に比定できる。

e類（84） 丈の長い高台を外反気味につけている。腰部の張りが強くて器高の高い、いわゆる深碗に伴うものと思われる。平安朝瓷器第2型式の新段階ないし第3型式（猿投編年O-53～H-72号窯式並行）の製品と思われる。

無台碗（85） 体部下方から底部の破片が1例のみ確認できる。底部は糸切り未調整である。器壁は全体に薄手である。

皿（86, 87） 体部の傾きから明らかに皿と推定できるのは、2例のみである。高台の断面形は、外面下方を内傾させた丈の低い三口月形を呈する。底部の調整は、回転ヘラケズリ（86）と糸切り後ナデ（87）が見られる。前者は平安朝瓷器第2型式の古段階（猿投編年K-90号窯式並行）に、後者は同第2型式の新段階（同O-53号窯式並行）に比定したい。

長頸壺（88, 89） 底部片のみ2例図示した。口頸部および体部片も若干あるが、小片のため図示できない。88は体部下方および底部外面に回転ヘラケズリ調整を施している。底部を除く外面全体に施釉がなされ、内底面には釉溜りが見られる。89は底部外面にナデ調整を施している。体部下方には流れ釉がおよんでおり、内底面に降灰が見られる。高台はいずれも断面台形を呈し、外端で接地する。

甕（90～92） 本調査で出土した須恵器および瓷器のうち、甕片と推定できるものは全体の約半数を占める。そのうち底部の小片が3例あり、いずれも平底であることから平安朝瓷器に伴う器形と思われる。なお、底部外面には例外なく砂粒痕が見られる。

口頸部の資料からは、口径18cm前後の小型の器形と、復元口径48cmに達する大型の器形が確認できる。小型の器形は、頸部が短く外上方へ開き、口縁部を下方へ突出させ端部を丸くおさめている。大型の器形は口縁部を上下に突出させ、端部はやや鋭い。

体部はいずれも小片のため図示できない。外面は平行タタキ目を残し、内面はヘラケズリもしくはナデ調整を施している。当て具痕を薄く観察できるものもある。

8. 中世陶器（挿図第49の93・94、第50の111）

行基焼の山茶碗・小皿および天目茶碗が各1例ある。

山茶碗（93） 高台をともなう底部片で、体部以上の器形は明らかでない。器壁は厚手である。底部外面はナデ調整が施され糸切り痕を観察できない。高台は断面逆三角形であるが、接地面はつぶれて面をなす。行基焼第1型式に比定して差し支えないだろう。

小皿（94） 高台をともなった底部片である。糸切りした底部の外縁に、断面逆三角形の高台を外反気味につけている。体部以上の器形は明らかでない。行基焼第1型式の製品である。

天目茶碗（111） 高台をともなった底部片である。見込みには黒褐色の鉄釉が施され、高台は露胎である。高台径は4.3cmを測り、底裏は内反りで削り込みは浅い。古瀬戸後期ないし瀬戸大窯期の製品であろう。

9. 近世陶器（挿図第50の107～110、112～126）

本調査では、平安朝瓷器に次いで近世陶器の出土量が多い。器種については、茶碗類・鉢類のほか香炉や花瓶などバラエティに富んでおり、時期的にも江戸時代全般にわたっている。

丸碗（107, 108） 口縁部から体部にかけて（107）と、腰部から底部にかけて（108）の破片が各1点確認できる。前者は復元口径10.8cmで、内外面に白色釉が施され、細かな貫入が見られる。後者は高台をやや幅広くに削り出して高台径は4.4cmを測り、内外面に鉛色の鉄釉が施される。

尾呂茶碗（109） 腰部から底部にかけての破片が1点あり、高台径は4.6cmを測る。内外面に鉛色の鉄釉を施したのち、濁ノ斑を散らしている。

腰鎔茶碗（110） 底部片であるが、内面に灰釉を、外面には畳付けを除く全面に鉛色の鉄釉を施している。底部のつくりは薄く、高台径は4.6cmを測る

その他の茶碗類（112～114） いずれも高台をともなった底部片であり、高台部分は露胎である。詳細な器種は特定できない。112は高台径5.3cmを測り、見込みには淡青緑色でガラス質の釉が約5mmの厚さで見られる。113は高台径5.0cmを測り、見込みに赤褐色の鉄釉が施される。114は高台径4.9cmを測り、見込みに茶褐色の鉄釉が施される。

刷毛目皿（119） 内外面に刷毛目文様を有し、復元口径は12.0cmである。高台は蛇の目形を呈し、内側が深く削り込まれたいわゆる筭背底である。全面に化粧土を施したのち幅約1.5mmの工具で螺旋状に掻き落とし、やや黄色がかった透明の釉を施している。また、口縁部から体部の内外面に薄青色で不透明な釉を滴らせ、模様を描いている。見込みにトチの剥離痕が見られる。刷毛目文様に関しては、19世紀前半と推定された古瀬戸小西遺跡出土例（註1）と酷似しているが、高台の形状が明らかに異なっており類例とはならない。これより新しい時期の製品か、あるいは瀬戸以外の産地から搬入された可能性もある。

片口鉢（115～117） 底部片のみ3例を確認した。115は、腰部の曲がり強く体部が直線的に立ち上がる器形である。削り出し高台で、高台径は7.0cmを測る。高台脇まで灰釉が施される。116は腰部がゆるやかに内彎する器形であり、117も同様と思われる。いずれも削り出し高台で、高台径は8.0cmを測る。内面は灰釉が施され、トチの剥離痕が見られる。腰部は露胎である。

黄瀬戸鉢（120） 底部から腰部にかけての破片が1例ある。削り出し高台で、復元高台径は15cmを測る。高台脇でわずかな段をなし、腰部はゆるやかに彎曲する。器壁は全体に厚い。高台内を除く全面に黄瀬戸釉を施し、内面はさらに緑色釉が流し掛けされる。17世紀代の製品であろう。

摺鉢（124, 125） 体部下方から底部にかけての破片が2例あり、口縁部は確認できない。体部および底部の外面に回転ヘラケズリ調整が施される。体部内面は縦方向に、内底は横方向に線条が刻まれる。全面に茶褐色の鉄釉を施すものの、内面は使用痕により摩滅している。

花瓶（123） 口頸部を欠いている。体部最大径は上半に位置し、反転により8.8cmを測る。高台は削り出しで、高台径は6.3cmを測る。体部下方以上に灰釉が厚く施され、一部は高台まで流れている。また内面全体にも薄く施される。頸基部に幅約1cmで縦方向の削ぎ彫りを連ねている。管見のかぎりでは、岐阜県多治見市の平野西窯において物原63層から出土した「御深井釉銅緑釉散らし丸ノミ削ぎ文双耳花瓶」（註2）が酷似しており、およそ18世紀前半の美濃窯製品と考えられる。

蓋（122） 頂部を欠いており、鈕の形状は不明である。また内面のかえりも先端を欠いているが、

土瓶の蓋と推定する。笠部外縁には推定8個の馬目模様を鉄絵で描いており、外面全体に白色釉が施される。産地での類例には接しないが、江戸時代後期から生産が開始される馬目皿と意匠を一にしており、幕末ないしは明治以降の製品と考えられる。

香炉 (118) 口縁部から体部上方の破片が1例ある。復元口径は7.2cmを測り、小型で筒形の器形である。口縁部は丸みを帯びて内方へ突出する。口縁部から外面全体に灰釉が施される。

燗鍋 (121) 露胎の脚部片を1例のみ確認した。坏部の器形は不明である。底径は4.0cmを測り、底面に顕著な糸切り痕が見られる。江戸時代半ば以降の製品であろう。

鉄鉢 (126) 日本絵具の容器である。一般には大型と小型を使い分けているが、そのうち小型の器形である。平面は長方形で、皿の深さは2.5mmを測る。底裏を除く全面に白色釉が施され、底裏には5mm角で「陋」「製」の2文字が刻印される。

註1 ・山下峰司他『古瀬戸小西遺跡』瀬戸市教育委員会 1991

註2 ・田口昭二他『平野西窯―多治見市埋蔵文化財発掘調査報告書第40号―』多治見市教育委員会 1993

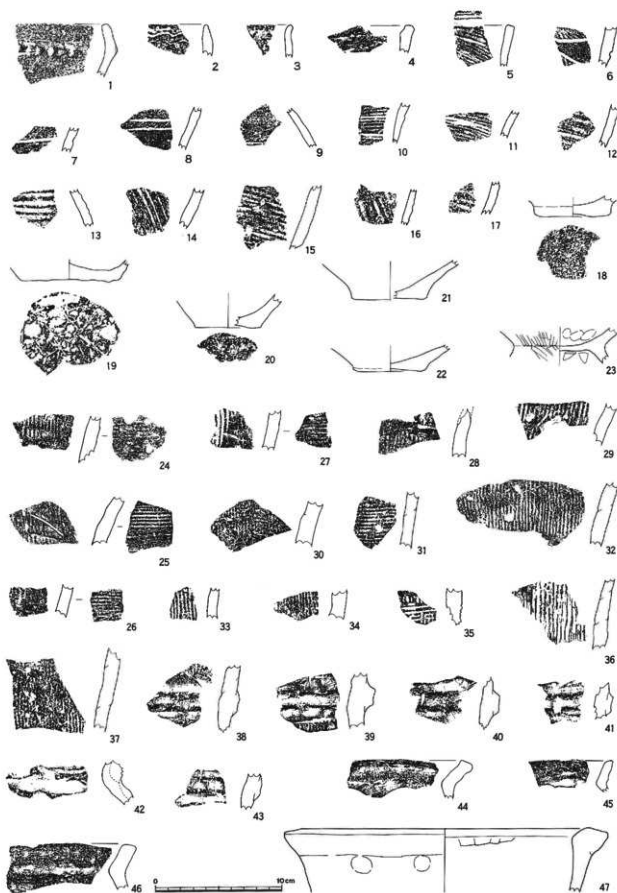
<参考文献>

1. 平安朝瓷器について

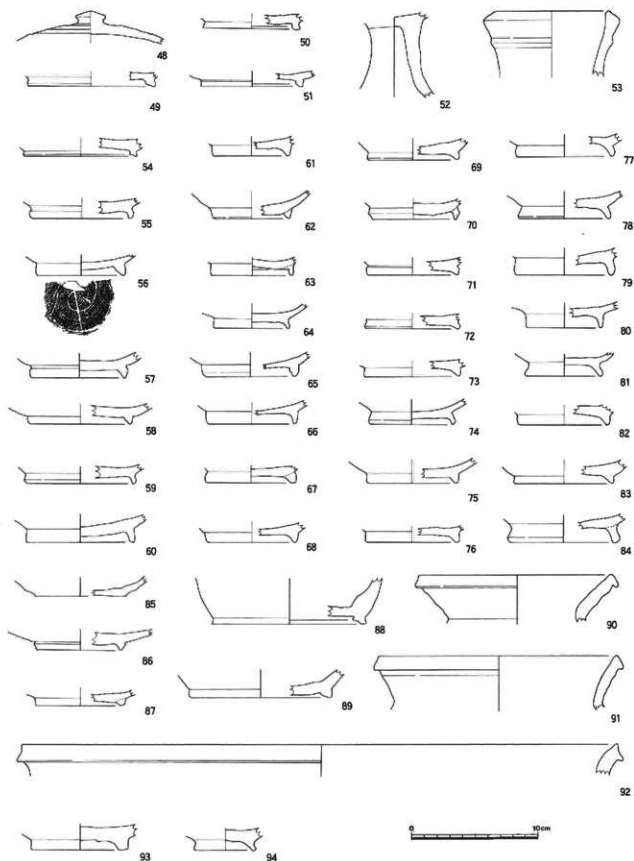
- ・久永春男「刈谷市における古窯の分布とその製品について」『刈谷市の古窯』刈谷市市誌編集委員会 1958
- ・芳賀 陽「渥美半島基部における窯業製品の変遷」『渥美半島における古代・中世の窯業遺跡』田原町教育委員会 1971
- ・伊藤 恵「豊橋市南部における平安朝瓷器古窯址群」東海古文化研究所 1979
- ・石川明弘「松明峠古窯址群」『岩屋下古窯』豊橋市教育委員会 2000
- ・植崎彰一「猿投窯の編年について」『愛知県古窯跡群分布調査報告(Ⅲ)』愛知県教育委員会 1983
- ・齊藤孝正「猿投窯における灰釉陶の展開」考古学ジャーナル 211号 1982

2. 中世陶器について

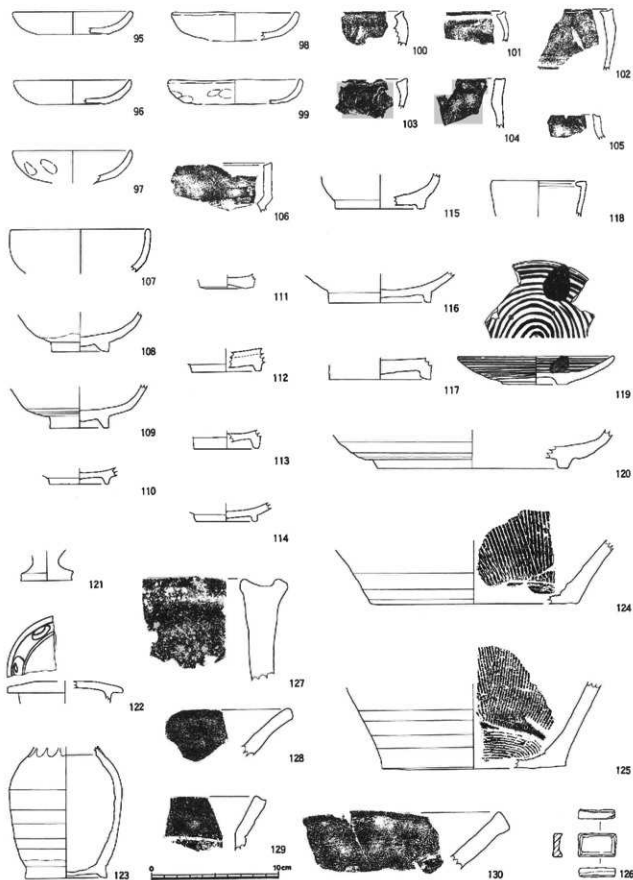
- ・久永春男「すえつき」『日本考古学講座第6巻』河出書房 1956
- ・田中 稔「尾張・三河の陶質土器」古代学研究 17号 1957
- ・久永春男「行基焼と古瀬戸陶器」『美が丘古窯址』愛知県知多郡知多町八幡公民館 1960
- ・杉崎 章「知多半島における行基焼古窯址の研究」『梶間岡古窯址』愛知県知多郡知多町八幡公民館 1961
- ・久永春男・芳賀陽「渥美半島古窯址群出土行基焼の編年」『豊橋市大岩町北山古墳群・豊橋市植田町大膳古窯址群』豊橋市教育委員会 1968
- ・藤澤良祐「瀬戸大窯発掘調査報告」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要Ⅴ』瀬戸市歴史民俗資料館 1986
- ・藤澤良祐「瀬戸古窯址群Ⅱ―古瀬戸後期様式の編年―」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要Ⅹ』瀬



挿図第48 行合前貝塚 出土遺物実測図 (1)



挿図第49 行合前貝塚 出土遺物実測図(2)



挿図第50 行合前貝塚 出土遺物実測図 (3)

戸市歴史民俗資料館 1991

3. 近世陶器について

- ・山川一孝「瀬戸の本業焼」『瀬戸市史陶磁史篇5』瀬戸市 1993
- ・藤澤良祐「近世瀬戸焼の生産と流通」『瀬戸市史陶磁史篇6』瀬戸市 1998

第5節 小 結

本遺跡から出土した遺物が示す時期は縄文時代・古墳時代・古代・中世・近世の5期であるが、この地点における本来の堆積層は4層で、1層～3層は他の地点から客土されたものである。このうち縄文式土器は無文で小片が多いが後期末の伊川津式・晩期初頭の西ノ山式・晩期末の水神平式が含まれており、3形式期の土器が7G・8Gの4-e層を中心に出土している。土壌SK-6・SK-7・SK-9からも出土しており、4-e層の下部が本来の包含層としてよいであろう。

この4-e層とそれを覆う混土貝層である4-c層・4-d層からは、平安朝瓷器と少量の古式土師器・埴輪・須恵器・行基焼・内耳鍋・かわらけ・近世陶器が出土している。それぞれが単独の包含層を形成せずに混在していることは、これらの層の形成過程を示しているのであろう。

4-a・4-b層と4-e層を切って地山の5層に掘り込んでいた溝SD-1とSD-2を伴う道路遺構は、路幅が265cmを測る。路幅1間が普通であった時代に路幅9尺をもつ道路は主要道で、この地域で考えられるのは吉田の市街と牟呂市場港を結んだ牟呂街道が想起される。4-c層・4-d層は、道路南側に形成された当時の表土層に当たろうか。

下層の道路遺構を覆う3層からは、縄文式土器・埴輪・須恵器・瓷器・内耳鍋・陶器などが出土している。3層を構成する3-a～3-1層の間には遺物の時代的変遷を示す秩序はみられず、これらの層が他地点からの土砂移動によって形成されたものであることを示している。移動の原因については、牟呂耕地整理組合による工事（1925年）・柳生川耕地整理組合連合会による工事（1939年）・柳生運河の浚渫工事などが考えられる。

溝SD-3・SD-4を備えた上層の道路遺構は、東脇地区の区画整理までバスが走っていた牟呂往還の一部である。路幅は2.7mを測り、下層の道路遺構と同じ9尺道である。上層の道路遺構を覆う2-a～2-f層は路面に散布された土砂の堆積で、遺物はほとんど含まれていない。

上部道路遺構を覆う1-b層は、1972年に完成した柳生川沿線土地区画整理事業の道路建設に伴う客土である。埴輪片と陶器片が出土しており、土砂の供給地に埴輪を備えた古墳が存在したことを示唆している。工事は東脇地内に限られており、未知の中期古墳が東脇に存在したことになる。

第6章 結 語

—牟呂地区における遺跡調査のあゆみ—

東脇遺跡群として知られている遺跡は、本報告書の歴史的環境で述べたように45カ所が確認されている。そのうち今回報告書としてまとめたのは、見丁塚遺跡A地点、F地点、林遺跡A地点、行合前貝塚の4遺跡である。

この地域はかつて渥美郡に属しており、1923（大正12）年に出版された『渥美郡史』には、遺物散列地として「牟呂吉田村大字牟呂字郷社（豊橋市合併後は豊橋市牟呂町字郷社）」の名が挙げられ、「石鏃を多く発見し稀には石斧も発見せられている。」と記されている。また、牟呂貝塚として「牟呂の高台を取り囲んで馬蹄形に東は坂津から西南市場に至るまでの一帯、長さ十町にも及ぶ一大貝塚がある」と記載されている。さらに渥美郡古墳一覧表にづぎのように記されている。

名 称	発掘年月日	発 掘 物	地 名	数	摘 要
三ツ山塚	大正2年	円筒埴輪	坂 津	1 個	一部発掘
牟呂土塚	寛政年間 明治13年	圭頭太刀、杏葉、鈴 金環、玉類、坐金	市 場	1 個	既発掘
市杵島社古墳			市 場	1 個	未発掘
東脇古墳			東 脇	1 個	未発掘



挿図第51 柳生川沿線土地区画整理事業の範囲

S=1:18500

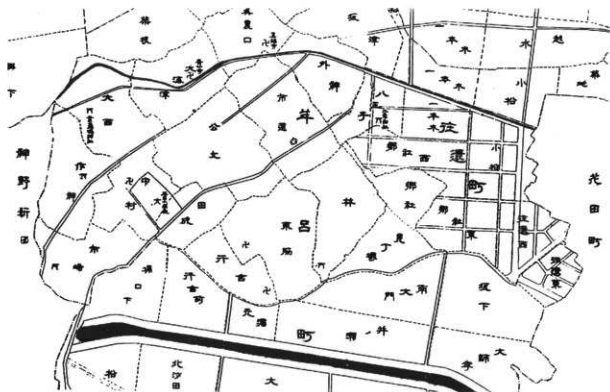
そして三ツ山古墳の規模や出土品（円筒埴輪）、牟呂王塚の出土品について詳述されている。

牟呂王塚の出土品については牟呂村由来記のなかに「明治十二年卯月渥美郡牟呂村宇市場大塚ヨリ所掘得古銅器」として10点の拓影が収録されている。また江戸時代末夏目可敬により編纂された参河國名所図繪にも寛政5（1793）年に王冠の飾りと見えしものが数多く出て役所に届けたが埋め戻すように命じられたという伝聞と亡父が「王冠の飾り一盆」ほどを実見したことや、自ら王塚に向向いて塚の形容を記録している。

1933（昭和8）年、白井梅里氏は『牟呂吉田村誌』を著し、そのなかで牟呂町大海津の設山を中心に牟呂の貝塚を紹介している。古墳としては、三ツ山、王塚古墳、市杵島古墳、権現社古墳を挙げて詳しく説明している。さらに「尚、巡るべきところは遺物散列地の見丁塚、郷社裏等がある。郷社裏に鎌倉時代以後迄人家の散在した事は井戸跡によって推察することができる。」とも記されている。

久永春男氏は、1948（昭和23）年、『三河の貝塚』を著され、三河国貝塚地名表のなかに牟呂町大西貝塚とともに「八幡社前」において「牟呂八幡貝塚」を記し、遺物として須恵器、土師器、内耳鍋を挙げられ、発見者・所蔵者は「牟呂八幡社」と記されている。

牟呂地区に発掘調査の手が及んできたのは、1958（昭和33）年から始まった柳生川沿線土地区画整理事業に関連してであった。この事業の範囲は、北は牟呂八幡社の東西参道から南は柳生川にいたる約900m、東は豊橋市下水道羽根井処理場から西は県道平井・牟呂・大岩線までの約1650mの間で、面積80.73haである。この部分の地形は、牟呂の台地が柳生川沿いの低地へゆったりと張り出し、台地の高い部分は標高4～5m、低い部分は2～3mであり、低地は0～1mであった。その台地上の字を挙げると西から行合、東脇、林、見丁塚とつづき、低地側は行合前、元浜、井ノ瀬、南大門、坂



挿図第52 柳生川沿線土地区画整理事業以前の小字名

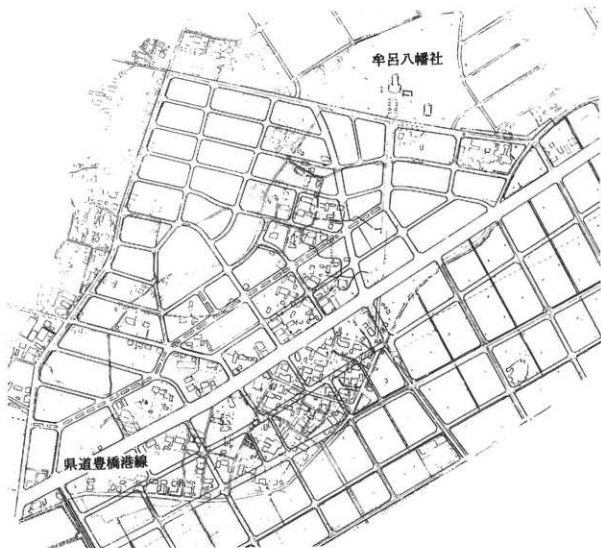
S=1:14000

下、大師孝へと水田がひろがっている。そのほか西端で牟呂町字田成、字公文、字市道の県道平井・牟呂・大岩線より東の部分が対象となり、東端は西羽根井町の一部におよんでいる。

事業は、往還町交差点から東脇の北部を貫き牟呂小学校の運動場南辺近くにいたる県道豊橋港線の建設から始まり、1961（昭和35）年のころには牟呂八幡社の表参道を断ち割るように設置された。区画整理事業が進行するうちに台地の縁端をめぐる牟呂往還は姿を消し、沖積地の埋め立てとともに台地との境が不明確となった。

1961（昭和36）年5月27日の中部日本新聞によれば、見丁塚の近藤二雄さん宅で家の移転にともない庚申様の祀ってあった庚申塚（現在は東脇古墳と呼んでいる）の地均しをしていたところ土器が出てきたので愛知大学の歌川学助教授が調査に訪れ、豊橋市教育委員会も調査したと報じられている。

1968（昭和43）年9月8日、豊橋市立牟呂中学校の生徒であった小畑頼孝と森田勝三が、区画整理にともなう道路新設工事中に貝塚と埋葬人骨を発見し、すぐに豊橋市民文化会館へ通報した。豊橋市教育委員会は、この遺跡を東脇貝塚として文化財保護法にもとづく発掘届を提出した。牟呂地区では最初の発掘調査であったが、土地区画整理事務所から1カ月以内という期限を付けられ、1968（昭和



挿図第53 県道豊橋港線の建設状況（昭和36年）

S=1:6300

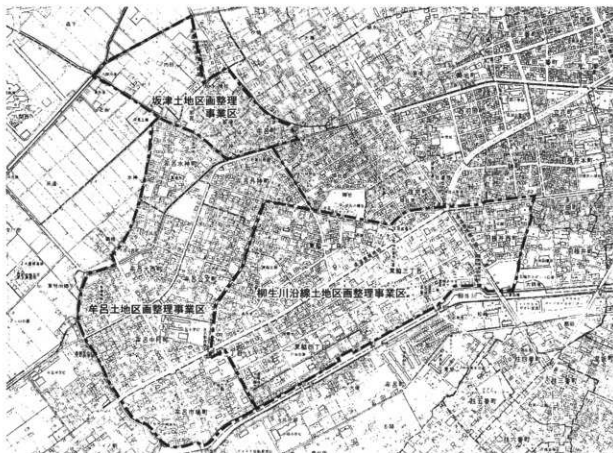
43) 年10月5日から11月3日までの日曜祝日などを利用して調査が行われた(註1)。

区画整理にともなう宅地造成は県道豊橋港線の北側でも進行し、同年12月8日には見丁塚遺跡A地点が発見され、東脇貝塚について発掘調査が行われた(註2)。

柳生川沿線土地区画整理事業は1972(昭和47)年に完了したが、その後も東脇地区の宅地化は進行し、1976(昭和51)年、見丁塚遺跡F地点の調査が地元の牟呂町誌編纂委員会のメンバーとそれを支援してくれる人々の協力によって行われた(註3)。1979(昭和54)年には畑地造成にともない林遺跡A地点(註4)、1983(昭和58)年には下水道工事にともなう事前調査として行合前貝塚(註5)の調査が実施された。しかし未調査のまま破壊される遺跡も少なくはなかった(註6)。

1975(昭和50)年5月31日、牟呂の歴史を調べる会(のちの牟呂町誌編纂委員会)が設立され、牟呂地区内の遺跡分布調査は着々と進められた。その結果は会報の『志香須賀』などに発表された(註7)。1975(昭和50)年5月の遺跡数44カ所は、1980(昭和55)年4月に99カ所と倍以上に増え、現在も調査は継続されている。

牟呂校区において土地区画整理事業の声が聞こえはじめた1980(昭和55)年3月31日、牟呂町誌編纂委員会(代表小林広三)から豊橋市教育委員会や牟呂土地区画整理組合等の関係機関へあてて遺跡保存についての要望書が提出された。豊橋市教育委員会は柳生川沿線土地区画整理事業の場合とは違う対策を立て、1982(昭和57)年度から始まる土地区画整理事業の着工前に、新しい組織として牟呂地区遺跡調査会を発足させ、土地区画整理事業前の遺跡確認調査や試掘調査等が行われた。最初の3



挿図第54 柳生川沿線・牟呂・坂津土地区画整理事業の範囲

S=1:18500

年間は他に公職のある者が専門調査員を兼任して調査にあたったが、1984（昭和59）年以降は調査体制も次第に整い、報告書も相次いで刊行された。柳生川沿線土地区画整理事業に関しても調査した4地点の資料を整理し、ここに調査報告書が刊行できることとなった。

牟呂校区では、引き続き坂津地区においても土地区画整理事業が計画され、すでに設計段階に入っている。この事業にあたっては、100年先の見通しをもった計画を立て、自然と歴史を生活空間に生かした町づくりを目指すよう望みたい。安全で快適な生活環境のなかに伝説や民俗や遺跡が残される新しいビジョンが実現することを心から願っている。

註1 伊藤 恵「東脇貝塚」『豊橋市埋蔵文化財発掘調査報告書第2集』豊橋市教育委員会 1970

註2 本書第2章「見丁塚遺跡A地点」参照

註3 本書第3章「見丁塚遺跡F地点」参照

註4 本書第4章「林遺跡A地点」参照

註5 本書第5章「行合前貝塚」参照

註6 森田勝三「東脇地区の遺跡破壊について」『志香須賀第7号』牟呂町誌編纂委員会古代部 1979

森田勝三「牟呂の遺跡分布図」『しかしが第8号』牟呂町社会教育委員会 1980

註7 小畑頼孝・森田勝三『牟呂地区遺跡概略』東三西遠青年郷土研究クラブ 1975

森田勝三「豊橋・牟呂地区の遺跡概略」『志香須賀第1号』牟呂町誌編纂委員会古代部 1978

森田勝三「牟呂の遺跡分布図」『しかしが第8号』牟呂町社会教育委員会 1980

報告書抄録

ふりがな	ひがしわきいせきぐん							
書 名	東 脇 遺 跡 群							
副書名								
巻 次								
シリーズ名	豊橋市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第 59 集							
編著者名	芳賀 陽、伊藤 恵、住吉政浩、小畑頼孝、森田勝三、石川明弘							
編集機関	豊橋市教育委員会教育部美術博物館							
所在地	〒440-0801 豊橋市今橋町3番地の1 TEL 0532-51-2879							
発行年月日	西暦2001年12月10日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所 在 地	市町村	遺跡番号	° ' "	° ' "		㎡	
みちようづかいせき 見丁塚遺跡 A地点	とよはしひがしわきいせき 豊橋市東脇一丁目 5番地の1ほか	23201	79461	34° 45' 05"	137° 22' 11"	681225 ～ 690108	13㎡	テニスコート造成
みちようづかいせき 見丁塚遺跡 F地点	とよはしひがしわきいせき 豊橋市東脇一丁目 2番地の1ほか	23201	79461	34° 45' 05"	137° 22' 15"	761219 ～ 761231	510㎡	宅地造成
は や し い せ き 林 遺 跡 A地点	とよはしひがしわきいせき 豊橋市東脇一丁目 21番地の1ほか	23201	79459	34° 45' 00"	137° 22' 03"	790523 ～ 790528	40㎡	畑地造成
ゆきあいはえかいづか 行合前貝塚	とよはしひがしわきいせき 豊橋市東脇四丁目 22番地の1ほか	23201	—	34° 44' 49"	137° 21' 52"	830721 ～ 830821	132㎡	下水道工事
遺 跡 名	種 別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
見丁塚遺跡 A地点	集落址	古墳時代・奈良時代		竪穴式遺構		土師器・須恵器・ 土製支脚・砥石		
見丁塚遺跡 F地点	集落址	弥生時代・古墳～ 奈良時代		方形周溝墓 竪穴住居址		弥生式土器・土師 器・須恵器		
林 遺 跡 A地点	集落址	奈良時代・平安時代 ・中世～近世		竪穴住居址		土師器・須恵器・ 平安朝瓦器・近世 陶器		
行合前貝塚	貝 塚	縄文時代・古墳～ 古代～中世～近世		貝層		縄文式土器・埴輪 ・須恵器・平安朝 瓦器・近世陶器		

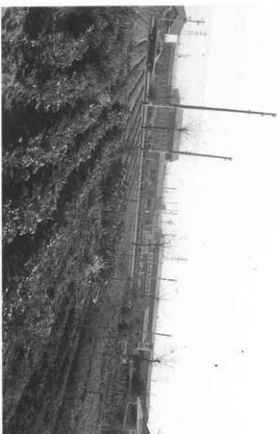
写真図版



1. 見丁塚遺跡A地点



2. 見丁塚遺跡B地点



3. 見丁塚遺跡E地点



4. 見丁塚遺跡F・G地点

図版第2 昭和50年頃の東脇遺跡群 (2)



1. 王塚貝塚



2. 東脇古墳と見丁塚貝塚



3. 八幡社前遺跡



4. 林遺跡A・B地点

図版第3 昭和50年頃の東脇遺跡群 (3)



1. 林貝塚



2. 高良社南貝塚

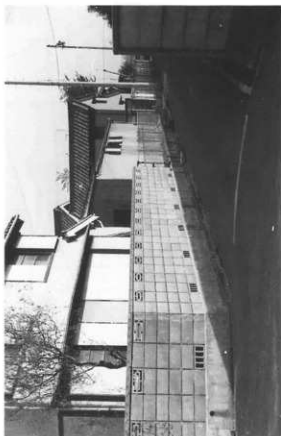


3. 東脇貝塚A地点



4. 東脇遺跡A地点

図版第4 昭和50年頃の東協遺跡群 (4)



1. 東協遺跡B地点



2. 法華寺西遺跡



3. 権現神社石垣



4. 行合遺跡

図版第5 見丁塚遺跡A地点 (1)



1. 見丁塚遺跡A地点の遠望 (左の森は牟呂八幡社、右の建物は旧仲六酒造)



2. 見丁塚遺跡A地点発見時の状態 (南方から)

図版第6 見丁塚遺跡A地点 (2)



1. 竪穴状遺構-1の西部（南方から）

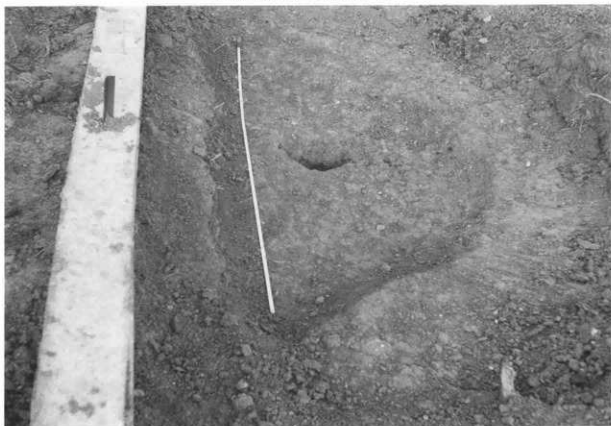


2. 竪穴状遺構-1の東部（南方から）

図版第7 見丁塚遺跡A地点 (3)



1. 竪穴状遺構-2 (北方から)



2. 竪穴状遺構-2 (南方から)

図版第8 見丁塚遺跡A地点 (4)



1. 柱穴検出状態（竪穴状遺構-1）



2. 柱穴検出状態（竪穴状遺構-2）

図版第9 見丁塚遺跡A地点 (5)



1. 土製支脚出土状態



2. 礫石出土状態

図版第10 見丁塚遺跡A地点 (6)

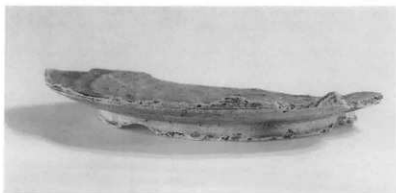


1. 須恵器 脚付盤出土状態



2. 土師器 甕出土状態

図版第11 見丁塚遺跡A地点 (7)



1. 奈良朝須恵器 坏 (15)



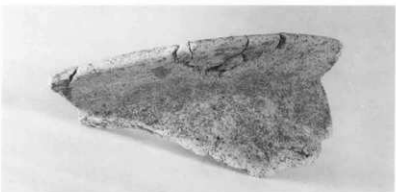
2. 古墳時代須恵器 坏 (70)



3. 奈良朝須恵器 長頸壺 (60)



4. 奈良朝須恵器 長頸壺 (59)



5. 土師器 甕 (73)



6. 土師器 甕 (71)



7. 土師器 甕 (72)



8. 土師器 甕 (74)

図版第12 見丁塚遺跡A地点 (8)



1. 奈良朝須恵器 蓋 (9)



2. 奈良朝須恵器 坏 (17)



3. 奈良朝須恵器 蓋 (6)



4. 奈良朝須恵器 坏 (27)



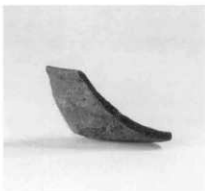
5. 奈良朝須恵器 脚付盤 (33)



6. 奈良朝須恵器 坏 (28)



7. 奈良朝須恵器 脚付盤 (32)



8. 奈良朝須恵器 坏 (29)

図版第13 見丁塚遺跡A地点 (9)



1. 奈良朝須恵器 蓋 (1)



2. 古墳時代須恵器 蓋 (69)



3. 奈良朝須恵器 坏 (26)



4. 土製支脚 (75)



5. 奈良朝須恵器 碗 (31)



6. 土製支脚 (76)



7. 平安朝瓷器 鉢 (56)

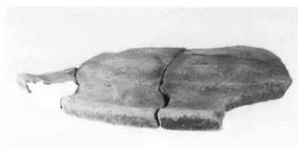


8. 砥石 (77)

図版第14 見丁塚遺跡A地点 (10)



1. 奈良朝須恵器 蓋 (5)



2. 奈良朝須恵器 蓋 (3)



3. 奈良朝須恵器 蓋 (14)



4. 奈良朝須恵器 蓋 (2)



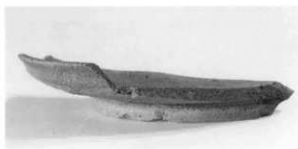
5. 奈良朝須恵器 坏 (16)



6. 奈良朝須恵器 碗 (30)



7. 奈良朝須恵器 碗 (55)



8. 奈良朝須恵器 皿 (34)



9. くの字口縁内耳鍋 (65)



10. 行基焼 碗 (63)

図版第15 見丁塚遺跡F地点 (1)



1. 発掘調査前の状態 (北東から)



2. 雪がうっすら積もった発掘調査区 (南西から)

図版第16 見丁塚遺跡F地点 (2)



1. 発掘調査区的全景 (東から)

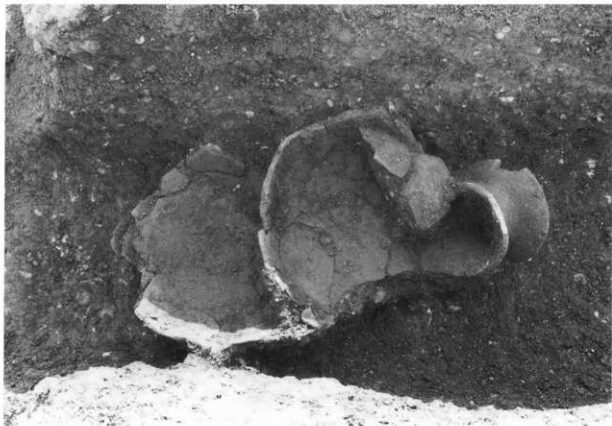


2. 発掘調査区的全景 (北から)

図版第17 見丁塚遺跡F地点 (3)

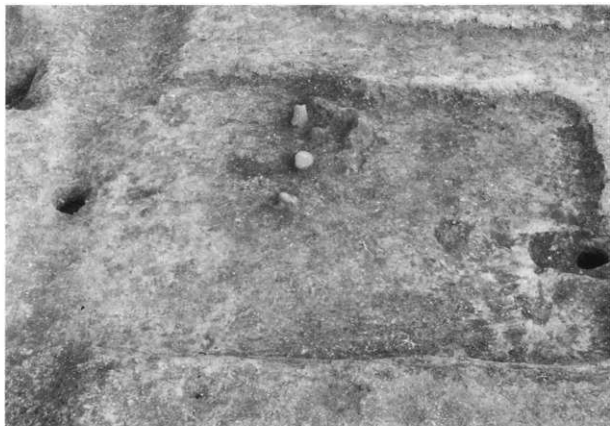


1. 方形周溝墓の全景（東から）



2. 南溝から出土した壺形土器

図版第18 見丁塚遺跡F地点 (4)



1. 第1号竪穴住居址の全景（西から）



2. 第1号竪穴住居址の窟



3. 遺物の出土状態（高坏）



1. 第1号竪穴住居址の全景（南から）



2. 遺物の出土状態（広口短頸埴）



3. 遺物の出土状態（石器）

図版第20 見丁塚遺跡F地点 (6)



1. 第3号竪穴住居址と第1号土壙状遺構（南から）

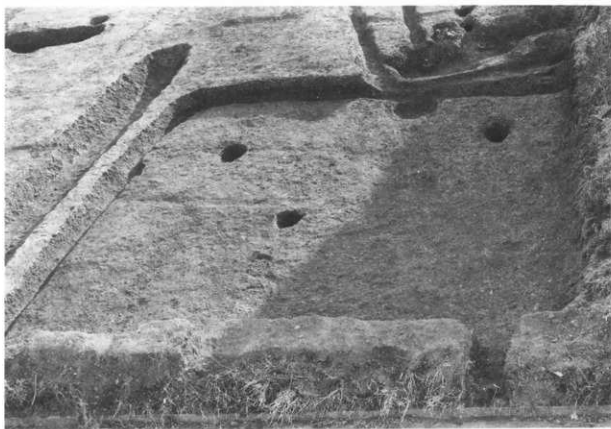


2. 遺物の出土状態（貯蔵穴）



3. 遺物の出土状態（坏身3個）

図版第21 見丁塚遺跡F地点 (7)



1. 第4号竪穴住居址の全景（北から）



2. 第4号竪穴住居址と方形周溝墓西溝の全景（南東から）

図版第22 見丁塚遺跡F地点 (8)



2. 2号溝状遺構 (東から)



4. 4号溝状遺構 (東から)



1. 第2号土坑状遺構 (東から)



3. 3号溝状遺構 (東から)

図版第23 見丁塚遺跡F地点 (9)



2. 第1号竪穴住居址出土高坏形土器

1. 方形周溝墓溝内出土壺形土器



3. 第2号竪穴住居址出土石器



4. 第2号竪穴住居址出土石器 (15)



5. 第2号竪穴住居址出土土盥 (16)



6. 第2号竪穴住居址出土広口短頸埴 (17)

图版第24 見丁塚遺跡F地点 (10)



1. 第3号竖穴住居址出土 钵 (21)



2. 第3号竖穴住居址出土 钵身 (32)



3. 第3号竖穴住居址出土 钵身 (33)



4. 第3号竖穴住居址出土 钵身 (34)



5. 第3号竖穴住居址出土 高环 (36)



6. 第3号竖穴住居址出土 高环 (37)

図版第25 見丁塚遺跡F地点 (11)



1. 第3号竪穴住居址出土高坏 (38)



2. 第3号竪穴住居址出土平瓶 (39)



3. 第3号竪穴住居址出土甕 (40)



4. 第3号竪穴住居址出土甕 (27)



5. 第3号竪穴住居址出土甕 (28)



6. 第3号竪穴住居址出土甕 (29)

図版第26 見丁塚遺跡F地点 (12)



1. 第4号竪穴住居址出土甕 (49)



2. 第4号竪穴住居址出土甕 (52)



3. 第4号竪穴住居址出土高坏 (53)



4. 第4号竪穴住居址出土製塩土器 (37)



5. 第4号竪穴住居址出土土鍾 (38)



6. 2号溝状遺構出土貝 (ハマグリ・アカニシ)

図版第27 林遺跡A地点 (1)



1. 発掘調査前の全景



2. Aトレンチ (北から)



3. Aトレンチ (南から)

図版第28 林遺跡A地点 (2)



1. Aトレンチ竪穴住居址



2. Aトレンチ竪穴住居址出土遺物



3. Aトレンチ集石遺構

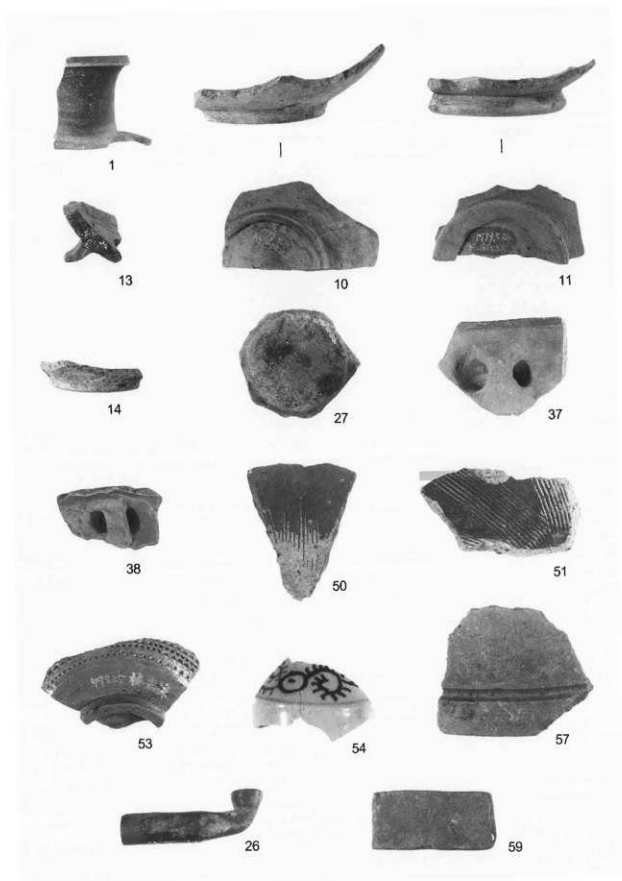


1. Aグリッド全景



2. Bグリッドの調査

図版第30 林遺跡A地点 (4)



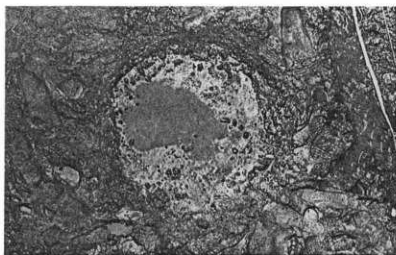
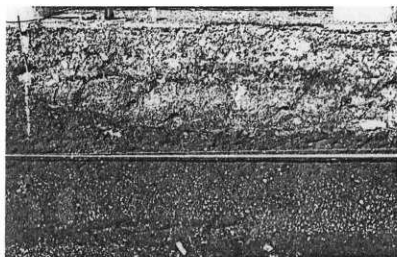
1. 林遺跡A地点出土遺物

図版第31 行合前貝塚 (1)



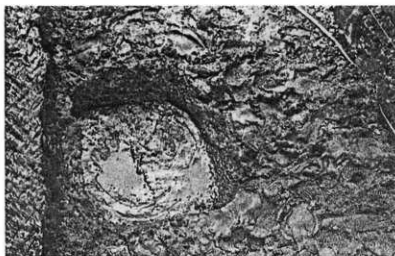
1. 発掘区北端部に現れた
旧牟呂往還

2. 発掘区北端部の
断面実測状況



3. 発掘区南端部に現れた
円形土坑 SK-1

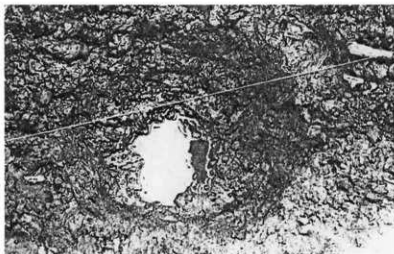
図版第32 行合前貝塚 (2)



1. 円形土坑 SK-2



2. 円形土坑 SK-4



3. 円形土坑 SK-5

図版第33 行合前貝塚 (3)



1. 縄文式土器出土状態

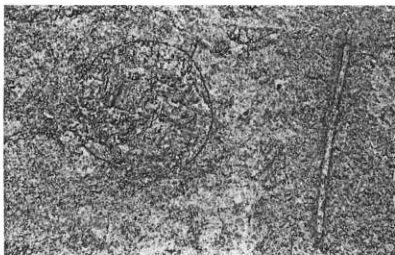


2. 瓷器片の出土状態



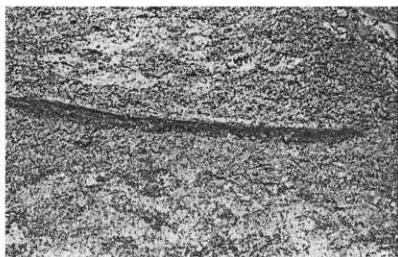
3. 瓷器片の出土状態

図版第34 行合前貝塚 (4)



1. 円形土坑 SK-3

2. 丸木弓状木片



3. 加工痕のある木片

図版第35 行合前貝塚 (5)



1. 縄文式土器 (1)



2. 縄文式土器 (2)



3. 縄文式土器 (3)



4. 縄文式土器 (4)



5. 縄文式土器 (5)



6. 縄文式土器 (6)



7. 縄文式土器 (7)



8. 縄文式土器 (8)

図版第36 行合前貝塚 (6)



1. 縄文式土器 (9)



2. 縄文式土器 (10)



3. 縄文式土器 (11)



4. 縄文式土器 (12)



5. 縄文式土器 (13)



6. 縄文式土器 (14)



7. 縄文式土器 (15)



8. 縄文式土器 (16)

図版第37 行合前貝塚 (7)



1. 縄文式土器 (17)



2. 縄文式土器底部 (19)



3. 土師器台付壺 (23)



4. 埴輪 (24)



5. 埴輪 (25)



6. 埴輪 (27)



7. 埴輪 (28)



8. 埴輪 (29)

図版第38 行合前貝塚 (8)



1. 埴輪 (30)



2. 埴輪 (32)



3. 埴輪 (33)



4. 埴輪 (34)



5. 埴輪 (35)



6. 埴輪 (36)



7. 埴輪 (37)



8. 埴輪 (38)

図版第39 行合前貝塚 (9)



1. 埴輪 (39)



2. 埴輪 (40)



3. 埴輪 (41)



4. 埴輪 (42)



5. 埴輪 (43)



6. 土師器壺 (44)

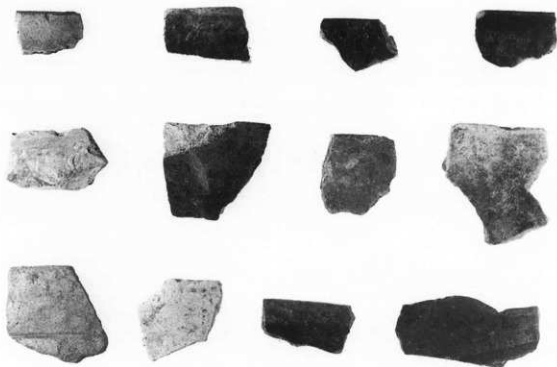


7. 土師器壺 (45)



8. 土師器壺 (46)

図版第40 行合前貝塚 (10)



1. 中近世土器



2. 中近世土器

図版第41 行合前貝塚 (11)



1. 須恵器 坏蓋 (48)



2. 須恵器 高环 (52)



3. 須恵器 瓶 (53)



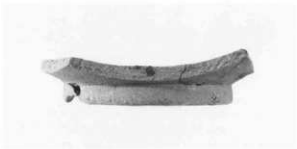
7. 平安朝瓷器 碗 (74)



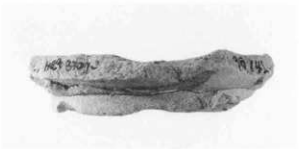
4. 平安朝瓷器 碗 (56)



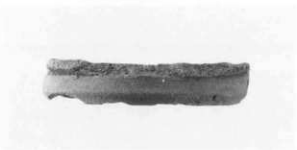
8. 平安朝瓷器 碗 (81)



5. 平安朝瓷器 碗 (64)



9. 行基焼 山茶碗 (93)

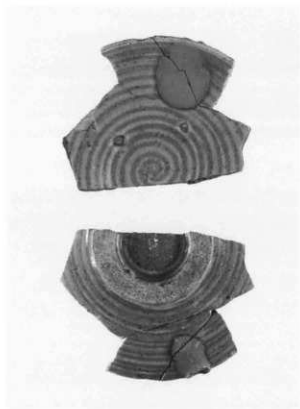


6. 平安朝瓷器 碗 (70)



10. 行基焼 小皿 (94)

図版第42 行合前貝塚 (12)



1. 刷毛目皿 (119)



2. 黄瀬戸鉢 (120)



3. 丸碗 (108)



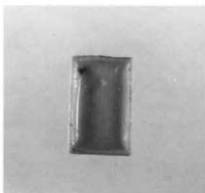
4. 尾呂茶碗 (109)



5. 乗燭 (121)



6. 蓋 (122)



7. 鉄鉢 (126)



8. 花瓶 (123)

豊橋市埋蔵文化財調査報告書第59集

東 脇 遺 跡 群

2001年12月10日

発行 豊橋市教育委員会 ©
教育部美術博物館

〒440-0801 豊橋市今橋町3番地の1

印刷 有限会社 岡崎製版所

